

おじいちゃんありがとう

「もーおーおじいちゃんの顔をわすれちゃうよ、ずっとあってないよ何であい理だけお見まいには行けないの」「かんせししようがこわいのであるべく子どもは近づけないでとかんごしさんに言われたの」「何だかお母さんの顔がこわい。まるでおこられたみたいだ。

「ふーんじゃあけいたい電話にかけていい、声を聞いてみるよ」「それともだめゆくりねかせてあげようね」「かんせんしようって何」「ばいきんさんの事かな」あまりせつ明してくれなかつた。またおこられた気がした。

「わかつたきれいに手をあらうから手紙をとどけてくれる」わたしは十回手をあらつた。わたしとおじいちゃんはなかがよい。自分で考えた手じなをひろうしあつたり絵を書くのがすきで二人でスケッチブックいっばいに書いたりした。それなのに、「にわの花の水まきをたのむよ」とれいぞうこのでん言ボードに書いてあつただけで入院してしまつた。おじいちゃんが今どうしているのか知りたかつた。手紙をとどけてほしいと思つた。病室に入れないのでおじいちゃんが五かいたのまどから、ちゆう車場にいるわたしに手をふつてくれた事があつた。わたしは、はずかしかつたけどお父さんにだつこしてもらつて大きく手をふつた。それからどれくらいつたのかな手紙のへん事がなくなつてしまつた。

千葉県

千葉市立星久喜小学校 三年

加藤 愛理

「今日はいそがしいよお赤はんをたいてたくさんりよう理も作つてビールもひやさなくちゃね」とおじいちゃんの事を聞くとふきげんになつたお母さんがうれしそうにわらつている。そしてわたしに「おじいちゃんかえつてくるよ」とVサインをくれた。わたしはむねが「ドキン、ドキン」とした。何回もにわに出てみどりようち園の角までむかえに行つた。しずかに車の止まる音がした。かみの毛がひな鳥のように少しだけしかななくて風がふいたらとんじやいそうなくらい細くなつていた。見なれないつえを、ついて「ふわーふわー」とゆつくりゆつくり歩いてきた。わたしはびつくりしてその場から動けなかつた。「あい理ただいま」体中の力をふりしほつたような声だつた。「あつおじいちゃんの声だ。元気はないけどいつものやさしい声だ」とびついたらたおれちゃうのでそつとつえをもつ手をにぎつた。手紙でやくそしたとおり病氣とたたかつてがんばつて、つらいちりょうにたえたんだ。「たくさんのはげましの言葉がつまつたお手紙を書いてくれてありがとう」とおじいちゃんがわたしに言つた。ほつべが「じゅわー」といたくなくてきたけどぐつとがまんした。「もう三歩でお家の中だよだいじようぶおじいちゃん帰つてきてくれてありがとう」とわたしは答えた。